

研究主題 「肢体不自由のある生徒に探究する力を育てる社会科の指導モデルの開発 —身近な地域における体験的な活動を中心として—

東京都教職員研修センター研修部授業力向上課
都立鹿本学園 教諭 五十嵐 美雄

第1 研究のねらい

肢体不自由のある生徒の実態として、特別支援学校学習指導要領解説総則等編（幼稚部・小学部・中学部）（平成21年6月）には、「身体の動きに困難があることから、様々な体験をする機会が不足しがちとなり、そのため表現する意欲に欠けたり、表現することを苦手としたりすることが少なくない」と、体験する機会の不足とそのことによる表現することに関する課題が示されている。

これまで私の指導してきた社会科の授業においては、生徒に日常生活との関わりから社会的事象について理解させることに課題があった。この課題に対して、視聴覚資料などで指導の工夫を行ってきたが、十分に解決に至らなかった。その理由の一つとして、生徒の生活経験が少ないことから、実感を伴った理解につながらないことが推察される。

そこで、身近な地域に出ることで、生徒に実際に行ってみる経験をさせ、それを基に、課題を見付け、解決する学習活動を工夫することによって、社会的事象について探究する力が育つのではないかと考えた。

以上のことを踏まえ、本研究では、肢体不自由特別支援学校の「中学部で中学校に準ずる教育を行う教育課程」（以下、「中学部の準ずる教育課程」と表記）で学ぶ生徒を対象とし、身近な地域における体験的な活動を中心とした指導モデルを開発し、生徒に探究する力を育てるための方法を明らかにすることをねらいとした。

第2 研究仮説

肢体不自由特別支援学校の社会科の学習において、身近な地域における体験的な活動を通して、生徒自ら課題を見付け、解決する学習活動を行うことによって、生徒に探究する力を育てることができるであろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

基礎研究においては、国や東京都の特別支援教育に関わる施策の資料や肢体不自由教育、体験的な活動に関連する先行事例を収集し、分析を行った。

2 調査研究

(1) 社会科の学習に関する実態調査

社会科の学習に関する実態調査を平成27年7月に実施した。調査対象は、都立肢体不自由特別支援学校4校において、中学部の準ずる教育課程で学ぶ第1学年から第3学年までの生徒とした。質問項目は、社会科の学習に対する関心や意欲に関する内容について10項目で構成した。

(2) 調査結果の概要と考察（有効回答数19名）

「社会科の学習は好きだと思うか」の設問では、肯定的な回答をした生徒の割合は9割以上であった。また、「ニュースを読んだり、見たりしているか」の設問では、肯定的な回答をした生徒は、約8割であった。

また、「社会科で学習したことについて、もっと調べてみたいと思ったことがあるか」の設問では、「ある」と回答した生徒の割合は、約3割であった（図1）。一方で、「社会科の学習で出てきた場所に行ってみたくと思うか」の設問では、「とてもあてはまる」又は「少しあてはまる」と回答した生徒の割合は、約9割であった（図2）。

調査の結果から、社会科の学習や社会の動きに対する関心や意欲は高いが、学習したことを更に追究しようとする意欲は低い傾向にあることが分かった。しかし、実際に行ってみたくという具体的な活動に対する意欲は高いことが分かった。

そこで、社会科の学習において、「調べてみたい」という意欲と「実際に行ってみたく」という意欲とを結びつけることで、探究する意欲が高まると考えた。

3 開発研究

以上の基礎研究と調査研究を踏まえ、身近な地域における体験的な活動を設定し、生徒が経験する活動と探究する学習活動を相互に関連させた指導モデル（図3）を考えた。

(1) 生徒に探究する力を育てる社会科の指導モデルの開発

これまでの社会科の指導において、校外での学習活動は、一単元に1回の設定があるかどうかであった。その理由として、肢体不自由のある生徒が校外での学習活動を行うためには、移動時間がかかることや引率する教員の体制を組むことなどを考慮する必要があり、学校周囲での活動が中心となっていたことが挙げられる。

しかし、生徒に探究する力を育てるためには、一単元の学習活動の中で、身近な地域における体験的な活動を複数回実施し、生徒の実態を踏まえ、社会的事象への興味・関心を高める活動と生徒が主体的に学ぶ活動を行う必要があると考えた。

(2) 生徒に探究する力を育てる指導の工夫

ア 生徒の興味・関心に基づいた主題の設定

世界の諸地域の学習においては、「主題を設けて地域的特色を理解させるようにすること」と中学校学習指導要領（平成20年3月告示）に示されている。本研究では、検証授業の対象となる生徒にとって興味・関心が高い「食に関すること」とアジアの地域的特色である「多様な文化」とを関連させて、「アジアの多様な食文化」を主題として設定した。

イ 社会的事象への興味・関心を高める体験的な活動の設定

アジアには我が国も含まれており、アジア以外の地域と比べると、生徒にとって身近であると考えられる。そこで、アジア諸国の飲食店を観察することによって、社会的事象への興味・関心を高めることができると考えた。観察や調査を行うための手段として、生徒が実際に行ってみる経験から、課題を見付けさせることとした。

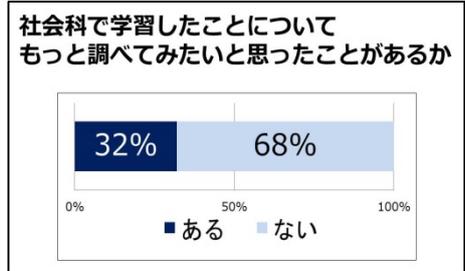


図1 調べようとする意欲

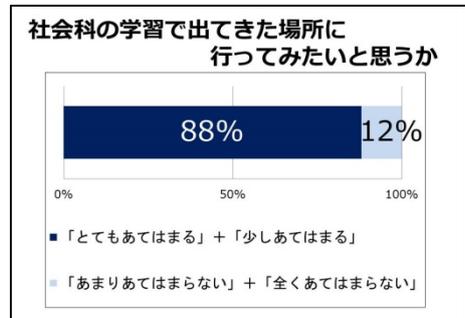


図2 行動しようとする意欲

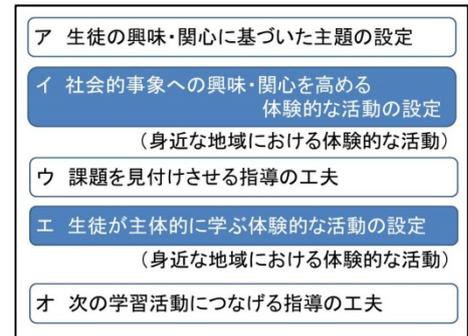


図3 探究する力を育てる指導モデル

ウ 課題を見付けさせる指導の工夫

生徒に探究する力を育てるためには、「もっと知りたい」、「もっと調べてみたい」という意欲を高めることが必要である。1回目の体験的な活動を基に、生徒に課題を見付けさせることで、2回目の体験的な活動につなげる学習の流れを考えた。課題を見付けさせるために、ワークシートを活用し、①「活動を通して、気が付いたこと」、②「活動を通して、気になったこととその理由」、③「もっと知りたいと思ったこと」の順で、生徒が思考を整理できるように構成した。また、1回目の活動に対して不安なことがあれば、2回目の活動への意欲が低くなり、課題を解決しようとする気持ちにまで至らないと考えた。よって、課題を見付けさせるだけでなく、生徒に活動に対する自信を付けることが重要であると考えた。

エ 生徒が主体的に学ぶ体験的な活動の設定

経験したことを社会科の学習と結び付けるためには、生徒に見付けさせた課題を基にして、観察や調査を行う体験的な活動に発展・拡充することが必要である。1回目の体験的な活動で、移動経路や活動場所について、見通しをもたせることができ、観察や調査に重点を置いた指導ができると考えた。課題に関連する資料を生徒自ら収集し、主体的に課題を解決する活動を行うことで、課題を探究する力を更に高めることができると考えた。

オ 次の学習活動につなげる指導の工夫

単元のまとめとして、生徒が考えたそれぞれの課題について、図や写真、文章でまとめさせることとした。自分で記録した写真を基に、分かったことや考えたことを文章でまとめさせることで、社会的事象に対して、自分の言葉で表現できるようになると考えられる。さらに、「もっと知りたい」、「もっと調べてみたい」ことを、単元の終わりに考えさせることにより、探究しようとする意欲を、次の学習活動につなげる指導を行うこととした。

4 検証授業

(1) 概要

都立肢体不自由特別支援学校の中学部の準ずる教育課程で学ぶ第1学年の生徒3名を対象に、「世界の諸地域アジア」に関する単元を設定し、検証授業を8時間実施した(表1)。身近な地域における体験的な活動については、移動等の活動時間を考慮して、連続する2時間とした。

表1 検証授業の単元計画

	学習内容	主な学習活動	探究する力を育てる指導モデル
第1時	・アジアの範囲と地域区分について確認し、人口や地形について理解する。 ・アジアの食文化について、身近な事例から理解する。	・アジアの人口、自然、産業について、地図や資料から読み取る。 ・日常生活の中にあるアジアの食文化について考える。	ア 生徒の興味・関心に基づいた主題の設定
第2・3時 (体験的な活動)	・アジアの多様な食文化について、学校周辺を観察し理解する。	・アジア諸国の料理に関する飲食店の様子を観察する。 ・公共交通機関を利用する。	イ 社会的事象への興味・関心を高める体験的な活動の設定
第4時	・観察を通して理解したことを整理し、主題に沿って、課題を考える。	・ワークシートを活用して、課題を考える。 ・次の学習活動を確認する。	ウ 課題を見付けさせる指導の工夫
第5・6時 (体験的な活動)	・設定した課題を基に調べ、アジアの多様な食文化について理解を深める。	・課題に基づいて調査する。 ・公共交通機関を利用する。	エ 生徒が主体的に学ぶ体験的な活動の設定
第7・8時	・調査したことをまとめ、日本とアジアとのつながりについて考える。	・調査したことを図や写真、文章でまとめる。	オ 次の学習活動につなげる指導の工夫

(2) 検証授業の考察

ア 主題の設定について

第1時では、アジア諸国の料理について、生徒に考えさせた。生徒の興味・関心の高い事柄であるため、料理名や国名について発言することが多くあった。また、授業後には、給食の献立にある料理がアジアに関連していることについて発言する生徒や、家庭学習で自分の興味のあるアジア諸国の料理について調べようとする生徒もおり、生徒の興味・関心に基づいた主題の設定は、学習意欲を高めるために効果的であったと考える。

イ 身近な地域における体験的な活動について

第2・3時では、生徒は、活動前に「行きたくない」、「行けるかな」という消極的な発言をしていたが、活動後の振り返る学習場面では、観察してきたことを意欲的に発言していた。さらに、「自分たちでも行けるんだ」と行動する自信についての発言もあり、1回目の体験的な活動によって、生徒の探究する意欲と行動する自信が高まったと考えられる。

第4時では、ワークシートを活用して、課題を見付けさせた。生徒はワークシートに記入することで活動を振り返り、活動で気付いたことを基に、課題を自ら設定した。ワークシートを活用することで、日常生活との関わりから課題を設定することができた。

第5・6時では、生徒は設定した課題を基に調査を行った。デジタルカメラを活用して、課題に関連する看板や国旗などの情報を自ら収集しようとする姿が見られた。また、「あの人と話してみたい」と更に違った視点で課題に迫ろうとする発言もあった。2回目の体験的な活動では、生徒が主体的に学習に取り組む姿や、更に探究しようとする姿が見られた。これらのことから、生徒に探究する力を育てるための指導の効果が表れたと考えられる。

表2 検証授業における生徒の発言とワークシートの記述

	第2・3時	第4時	第5・6時	検証授業後
生徒A	<発言> ・「行きたくない」 ・「お店の壁にアジアの料理の写真や値段が書いてあった」	<発言> ・「アジアのお店が多くあった」 <ワークシートの記述(課題)> ・何カ国のアジアの国の飲食店が存在しているのだろうか	<発言> ・「あの人と話してみたい」(活動後) ・「もう一人で行けるよ」	・もう一度行って調べてみたいと思った。 ・もっと観察する視点をはっきりと確認していくとよかった。
生徒B	<発言> ・「行けるかな」 ・「駅周辺にはアジアに関するお店が多くあった」	<発言> ・「たくさんの人がいた」 ・「細い路地は、初めてだった」 <ワークシートの記述(課題)> ・アジア諸国の料理の飲食店は、どれくらいあるのだろうか	<発言> ・「あのお店の方は、何をしているのだろうか」(活動後) ・「次は、いつ行けるの」 ・「もっと調べてみたい」	・分からないことについて調べてみたいと思うようになった。

第4 研究の成果

本研究の成果として、2点のことが考えられる。

まず、探究する力を育てるための指導においては、身近な地域における体験的な活動を複数回行うことで、探究する意欲が高まるとともに、活動に対する自信が付くことが分かった。

次に、ワークシートを活用して、生徒が自ら経験したことを基に課題を設定させることは、主体的に学習に取り組ませるための指導に有効であった。

第5 今後の課題

社会科の指導の中で、中学部3年間を見通して、身近な地域における体験的な活動を取り入れたカリキュラムを作成していくことが今後の課題である。また、総合的な学習の時間や特別活動との関連を図り、生徒の学習経験と社会科の学習を結び付けた効果的な指導計画を作成することも必要である。